

甲陽学院中学校 2020／11／3

# 社会 I 部

～歴史の *if*～

## 前書き

とりあえず、手に取って頂きありがとうございます。甲陽学院社会 I 部部長の小佐々と申

します。ひょっとするとそこらへん、うろついているかもしれません。

「なんやねんこの部活」なんて思っている方も多数いらっしゃると思うので説明しますと、この部活は主に**社会科**の内容を（**地理：歴史：公民＝１：998：１**）扱う、総勢８人の部活です。はっきり言って小所帯ですが、部員の**個性**ならどこにも負けない自信があります。普段は**新聞記事**に書かれた内容について「あーでもない、こーでもない、共産主義がどうだ、大東亜共栄圏がこうだ」といった具合に、暴論を交わしています。これだけ聞くととんでもない部活ですが、テスト前はみんなで**テスト勉強会**をやったりもしています。**雑学の知識**を掃いて捨てたら富士山ができます。部員は後で紹介しています。

今回の部誌ですが、**歴史の「if」**ということでやっております。少し文学的にしてまとめると、「死人の後悔や夢を文章にして紡ぎ出す」といったところですよ。

もう一つ、**クイズ企画**もやっています。今回は音展展示**古代ギリシア・ローマ**なので、それに乗っかりクイズテーマは**ギリシア・ヨーロッパ**です。問題数が少し多いのですが、わりと手早く解けるとおもいます。15問全て解けると素晴らしいですね。是非やってみてください。

言い訳はこの辺にして、ここに来られる方には「俺は歴史とかってキライやったなあ・・人名とか覚えられなかったわあ」という方もきつといらっしゃると思います。正直、覚えにくいものは本当に覚えにくいのです。ですが、「歴史」という英単語を思い出して下さい。そう、「history」つまり、「**his story(彼の物語)**」です。何が言いたいかって、歴史は覚えるのではなく、読んでその時代の空気を吸う。っていうことなんです。偉人だってネタはたっぷりあります。「デブすぎて馬に乗れないナポレオン」だの「『ハゲ』と言われたくないカエサル」だの「出っ歯で小柄な源頼経」だの、「お前ら小説の登場人物かっ！」と言いたくなるような人ばかりです。そう思うと、どことなく**親近感**がわきませんか？

かなり長くなってしまいましたが、これで止めようと思います。

小佐々 優大

## 部員紹介

安積義慶・・・社I屈指の**雑学**マニア。元星座オタク。

永田一真・・・軍オタ。「戦艦**榛名**が一番かっこいい」らしい。

土井遥斗・・・タイピング担当（なお変換がぐだぐだな模様）。**数学**が好き。

西野倫汰・・・**海軍**オタク。「イージス艦はカクカクしてて嫌い」

小田蒼海・・・**友達**を作るのが得意。

草場紀太・・・たまには**部活**に来てください。

阿比留将・・・社Ⅰ唯一の二年。**投資**をしているらしい。

小佐々優大・・・社Ⅰ唯一の三年で部長。社Ⅰの**個性**が強くなったのは多分この人のせい。

〈訂正〉絶対にこの人のせい（断言、部員談）。

## もし嵐が起きなかったら・・・？（蒙古襲来）

安積義慶

1274 年当時の中国「元」は東ヨーロッパから、朝鮮半島までかつて無い**大帝国**を築き、**日本の侵略**も考えた。フビライは日本に朝貢の手紙を送るが、**鎌倉幕府 8 代執権北条時宗**はこれを黙殺、武士に用心をよびかけた。これがもとで起きた事件が**蒙古襲来**だ。結果的に日本は進行を阻止できたが、その大きな理由は日本海の荒々しい天候のおかげだと言われている。もし嵐が起きていなかったら日本はどうなっていただろう。

勘違いしている人もいるかもしれないが、嵐が起きたのは第二回目の**弘安の役**の時である。弘安の役では**14 万の大軍**が日本におくられた。その時に救いとなったのが「**神風**」だ。こ

れで半分以上の兵が沈んだ。もし、これがなかったら日本は、**14万の兵**を前に戦わなければならない。しかし、とは言っても、やはり日本軍は屈せずに**命がけ**で戦い勝っていたと思う。

日本は高い弓の**技術**を誇っていた。武士は日々、武芸に励み、流鏑馬などで騎射の腕を磨いていた。

『蒙古襲来絵詞』をみてもわかるように、元の兵に幾本の日本兵の矢がささっていることがわかる。それに日本は前回の『**文永の役**』で対策を練り、防御を固めた。有名なのが**防塁**だ、高さは2m強、はしごを使わなければ登れない。さらに**奇策**を持っていたことが判明した。第一回で元軍が使用した火薬「てつはう」、爆発音と共に馬を驚かせ、高い殺傷能力を持った。弘安の役では、その仕返しに、アンモニア濃度を高めた糞尿を艦に投げ込んだ記録がある。正に倍返しと言ったところであろうか？

逆に元の方に目を向けてみよう。フビライの代では実は**元の衰退**が起こっていた。**諸国の反乱**や、侵行のための**財力の低下**、それが主な原因だ。さらに当時元の国内で**黒死病**が流行していた。退却した原因の1つだ。また、日本で戦うにしても必ず食料や矢の不足で引き返さなければならない。そう考えると、元は**圧倒的に不利**な状態で戦わなければならない。すると嵐がなくても日本は勝てたのではないかと考えている。

しかし、どっちにしても**鎌倉幕府の崩壊**を進めたことには間違いはない。

## もしもベルリンの壁が崩壊していなかったら 永田一真

ベルリンの壁が**崩壊**しておらずいまだに東ドイツがあったらまず考えられることが**民主化の推進**だ。経済対策の失敗などにより国家として運営が困難になり**ソ連**は1991年史実通り崩壊はまぬがれなかったことは確かだ。これによりソ連という**後ろ盾**をなくしたドイツ、**社会主義統一党**(以下**SED**)のエゴン・クレンツは、**デモ**の活発化により失脚、その後、ハンス・モ・ドロウとギュンターシャボフスキーの**後継者争い**の末、マスコミなどに精通するシャボフスキーが自由選挙(表面上)で勝利を勝ち取り、SED書記長に就任。ソ連という**脅威**がなくなり、シャボフスキーは、ゴルバチョフの**経済改革と民主化**を両立、1990年には、自由選挙を実施、グレゴールギジが首相に選出される。また、1992年にはリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーとの会談も実施、ゴルバチョフ財団などの支援も受けつつ西ドイツと**自由貿易協定**を締結、また、**通貨を統一**。だが**失業率**は一向に回復せず1997年失脚。ザビーネ・ベルマンサポールが後任につき、主に、国民の**人権の尊重**や、**保健福祉**の充実を図るがこれといった結果を出せないまま辞任。そんな中、西ドイツ出身で今まで差別的に見られていたクラウス・ヴォヴェライトが選挙で勝利する。また**フォルクスワーゲン**に国家単位での**投資**を行い、国民車のイメージを強めるとともに、経済回復に授与。この他にも、国民からの**圧倒的**支持を盾に、次々と改革を行い、翌1999年には**EU**に加盟、先進国とする。2008年**リーマンショック**もリーダーシップを発揮し、切り抜け。2009年に辞任、この期間

はドイツの春と呼ばれる。後任にミヒャエル・ミュラーを指名。その後ミヒャエル・ミュラー政権下でも順調に経済成長が進み、東ドイツが吸収する形での**ドイツ統一**が実現。2011年統一を見届け辞任。辞任理由については、ベルリンの壁による被害者の皆様への歴代党首を代弁してのお詫びと語る。「**東欧の奇跡**」として、ベルリンの壁は、負の遺産として、完全な保護下におかれ、今では観光名所になる。

## もしクレオパトラの鼻が低かったら？

土井遥斗

(状況説明)

ブルートゥスらがユリウス・カエサルを暗殺。カエサルの部下アントニウスがクレオパトラに魅了され無理やり妻にした。そしてオクタウィアヌスとの対立が勃発、オクタウィアヌスとアントニウスが戦う。この戦いをアクティウムの海戦という。そのあと、アントニウスが敗れた誤報がクレオパトラへいき、クレオパトラはコブラに自分の体を噛ませて自殺…クレオパトラが自殺したと聞いたアントニウスは自害…結果、オクタウィアヌスは勝利。

では、パスカルが言うようにクレオパトラの**鼻が低かったら**、どのように変わるだろう。そもそも、アントニウスはクレオパトラの鼻が低いのでクレオパトラのことを**好きにならない**。それだとオクタウィアヌスとも戦わない。それだと**プトレマイオス朝**は滅亡しない。当時のプトレマイオス朝は**天文学**などが発達していたのもっと栄えていたのかもしれない。

## 真珠湾よりシベリアへ ～北進論～

西野倫汰

一九四一年二月八日未明、英領マレー(現マレーシア)への上陸、その直後の**ハワイ真珠湾**攻撃のアメリカ太平洋艦隊と航空基地への奇襲攻撃と同時に米英蘭に対し宣戦布告、**大東亜戦争(太平洋戦争)**を開始した。戦いは軍部の予想に反して3年8カ月に及ぶ持久戦となり、序盤は日本が善戦したものの、次第に米の物量に押され、結果は日本の惨敗に終わった。

戦前当時の日本では、大きく**2つの戦略**が存在した。**マレーやフィリピン、蘭印**(現インドネシア)などに侵攻して石油をはじめとする物質を確保する**南進論**と、ソ連に進行して**シベリアや樺太**を手に入れようという**北進論**だ。伝統的に、主に前者を海軍が、後者を陸軍が指示した。しかし、1941年1～3月の**タイー仏印**(現ベトナム・ラオス・カンボジア)間の**紛争調停**、同年の4月の**日ソ中立条約**など、次第に陸軍が南進論に同調しだした。もっとも、対米開戦は陸海共に望まず、マレー、フィリピン、蘭印などへの侵攻は慎むことで一致していた。だが6月、ドイツが**対ソ戦**を開始、日本にも対ソ戦を求めた。これにより軍部は、対英米戦を覚悟で**南方進出**を強化したうえで、北方においてもソ連の敗色濃厚とみればすかさず参戦しようと満ソ国境に**関東軍特種演習**(関特演)と称した85万の軍を集めた。いわゆる熟柿論である。

今回のテーマは、この時帝国がすぐに**対ソ連開戦**に向け(渋柿論)で動いていたなら、大戦の結末はどうなっていただろうかということだ。

戦力で見れば、戦車などの**機械化戦力**はソ連が上回っていたが、日本軍も軽装備ながら、日中戦争で**戦い慣れ**、得意の**夜戦**や**潜入作戦**を生かせば十分対等に戦えただろう。さらに日本は、優秀な海軍の**艦砲射撃**に、航続距離の長い**零戦部隊**をもっていた。制空権を手にし、ウラジオストクやハバフロスク等の重要拠点を速やかに制圧できたと思われる。さらに極東ソ連軍は、ドイツの進行による西方からの**補給線の寸断**の危険も抱えていた。

以上より考えられるシナリオは、スターリングがシベリアを早々にあきらめ、日本と休戦、**モスクワ防衛**に全力を投入するというものだ。このシナリオだと、極東からモスクワに援軍が来ることはなく、正史通りドイツがモスクワ政略に失敗しても、史実のように大敗して押し戻されることはなかっただろう。

ここで最も重要なのは、米の参戦の有無だ。英米は日本の北進を極度に恐れたが、当時の米世論を見ると、孤立主義者による**反戦論**が根強く、米領への直接攻撃がなければ米参戦の可能性はかなり低かっただろう。仮にそうなれば、日本がソ連との休戦、講和に応じずに北進を続けていれば、独ソ戦におけるドイツの勝利、**ソ連降伏**の可能性は大きい。だとすればその後、日本が英から**インドを開放**し、日独が中東で握手することが可能となり、大戦は長期膠着に陥ると推測できる。すなわちそれは、日本が**長期不敗**の態勢を築くことを意味する当時の英首相チャーチルや、米將軍アルバートウェーデルマイヤなどもその可能性を指摘した。

さらに米は、蘭印進行までなら**対日石油禁輸**までしか実行しないとの考えを持っていた。当時日本の軍部は蘭印進行が対米戦につながると考えていたが、蘭印を手にしたうえで、北進するのが日本にとって**理想の展開**だったのだ。

しかし、蘭印進行はやはり英米戦を誘発する恐れは一定ある。そうなければ逆に、南北の**二正面作戦**を迫られ、正史以上の苦戦も考えられた。だからといって蘭印がなければ石油が足りない。北樺太の油田だけでは全然足りない。ゆえに、日本は南進せざるをえなかった。対ソ連に敗れば、日本が**ドイツや朝鮮**と同じ道をたどり、今日の**経済大国**としての日本は存在しなかっただろうということはすぐに予測される。

しかし、当時の英米ソが、独ソ開戦を受けて日本の北進を必死に避けるように動いたのは事実であり、日本が北進する可能性は十分にあったのです。

## もし信長が本能寺で死んでいなかったら

小田蒼海

ぼくは**織田信長**をとてすごい人だと思っています。なぜなら勇気があり何ごとにもおそれなかったからです。**明智光秀**に殺されていなかったらおそらくは少しずつ、陣地を広げどんどん領地を増やすことによって**全国統一**をしていたと思います。でも織田信長はもっと領地を広げようとして外国の領地をうばおうとして負けてしまうのではないかと思って

います。なぜなら織田信長の部下の**豊臣秀吉**も全国統一したあと外国に手を出して負けてしまったように、勝ちつづけたらもっと手を出してしまうと思うからです。でも全員が協力することができているとしたら勝っていたのかもしれないと少し思います。だからこそ信長には死んでほしくなかったし、もっと強くなれていたのと思う気持ちもある反面、信長が生きていたらもっと暴れて負けてしまうことがあるかもしれないしこのほうが良かったのかともおもいます。でも織田信長はすごい人なので尊敬しています。

## もしナポレオンがいなかったら

草場紀太

まず**ナポレオン**は世界を変えた人だ。**文化**をそして**経済**を。そのため今と同じ世界を作るにはナポレオンのような**軍事力**そして謙虚な人と人の器を見る目を兼ね備えた人でないとだめだ。しかし現実、たぶんナポレオンのような人はいないと思う。するとこの世界はどのようになっていたのか。まず**絶対王政**は潰れてしまい、もしかしたらフランスという国は今では**過去のもの**になっていたのかもしれない。近代の**法典**も違ったかもしれないし効率的な食料の保存法や瓶樽もできた。また右側通行にならなかったかもしれない。それほどにナポレオンがやったことはかなりすごいことだということがわかる。つまりナポレオンがいなければ今の世界と似ても似つかぬ世界になっていたのかもしれない。

## もしペストがなかったら

阿比留将

- ・**教会の権力**が維持される

実際には教会の励ましにペストへの恐怖が勝り、教会の権力が下がることになる。

- ・領主が間接支配する**荘園制**が維持され**農奴**が存在したままになる。

実際には農奴が反乱を起こし、**封建的**な荘園制が崩壊し、農奴が**自作農**となり、自作農が増えた。

- ・**ルネサンス**の文化ができなかった。

実際には、イタリアでルネサンスの文化が発達し、ヨーロッパが大活躍する。

- ・新たな価値観が生まれることがなく、ヨーロッパやアメリカの大活躍の時代がなくなる。または延期される。

実際には、荘園制の崩壊や教会の権力低下などにより新たな価値観が多く生まれ、ヨーロッパやアメリカが大活躍する。

このように、様々なことが考えられる。つまり、**ペスト(黒死病)**は歴史に大きな影響を与えていたことが分かる。

## ソロモン諸島攻防戦で日本が勝っていたら

小佐々優大

いきなりで申し訳ないが、太平洋戦争の**転換点**をご存じだろうか。ミッドウェー海戦(帝

国海軍の**進撃ストップ**)、**ソロモン諸島の攻防戦**(熟練パイロット多数喪失)、**インパール作戦**(帝国陸軍多数の兵士を失う、正式にはウ号作戦)、**レイテ沖海戦**(連合艦隊壊滅。「特攻」に主眼が置かれるようになる)の四つである。今年終戦75年ということで、今回はソロモン諸島～具体的に言えば**ガタルカナル島**(現在ソロモン諸島という国の首都がある、以下ガ島)～で日本軍が無傷で(ここ重要)**飛行場**を完成させ、かつ上陸を仕掛けた(八月七日)米**第1海兵師団**がほぼ全滅に近い損害を受けた(制空権のない状況で上陸作戦をするとうなる)として、そこからの戦争の展開をシミュレートしてみる。

まず、このときの戦況から。この時点で帝国海軍は空母機動部隊の第三艦隊に**空母6隻**(ただし改造空母も含まれる)を配備しており、パイロットも精鋭揃いであった。対する米艦隊は**5隻**。(まだ米軍の物量チートは発動していない)。ただし、「レンジャー」と「ワスプ」はまだ大西洋にいて、太平洋にいるのは「サラトガ」「エンタープライズ」「ホーネット」の3隻である。しかも**パイロットの練度**も日本側に劣っている上、そもそも**飛行機の性能**が日本に劣っている。さらに、米戦艦部隊は**修理中**である。よって、まだ日本に**逆転のチャンス**はあったのだ。

このシミュレーションでは、日米海軍のガ島を巡る**大激戦**は日本有利に進むはずだ。なぜなら、日本にはガ島の航空隊があるからである。一つの例を挙げよう。1942年11月12日、第三次**ソロモン海戦**第一夜戦が始まった。**ガ島砲撃**のために突入してきた日本の**第三戦隊**VSガ島に**輸送物資**を送る船団の支援をしていた米の**巡洋艦部隊**の戦いである。この戦いは戦術上日本の勝利だったが、戦艦「比叡」の舵に魚雷が命中してしまう。この傷により比叡は航行できなくなり、曳航しようとしたところにガ島航空隊が**空襲**をかけ、さらなる被害を出し、結果自沈してしまった。この例から分かる通り、**基地航空隊の存在**というものはかなりおおきなものである。それに、ガ島航空隊の規模はおそらく海軍戦闘機96機、陸上攻撃機(双発の爆撃機)60機、陸軍戦闘機40機(かなり大雑把に見てます)ほどだと思われる。これならいかに米軍といえども、撃破するには時間がかかる。そして、日本軍は**貴重な時間**を稼ぐのに成功した。米軍はガ島奪取に**多大な戦力**を投入する・・・はずだった。例えば**戦艦**や**巡洋艦**を派遣して基地を**砲撃**したりするだろう。史実日本がそうしたように。また、**小型艦艇**で物資を生き残った部隊にとどけようとするだろう、史実日本が(略)。しかし、史実日本はそこで**大量の駆逐艦**を失った。その数は(周辺も含め)42隻にのぼる。駆逐艦は**艦隊の便利屋**なので、この損失は大きい。

で、日本側は史実でかなりの損害を与えている。例えば「**ルンガ沖夜戦**」では**巡洋艦部隊**を駆逐艦一隻と引きかえに**壊滅**させた、第一次ソロモン海戦では旗艦が小破しただけで米艦隊を壊滅させている。残念ながら逆の例はほぼない。これは日本軍が夜戦に力を入れていたからである。が、実をいうと、米は船舶損失についてはそんなに痛くないのだ。さっき「痛い」と言ったのは、日本が**建艦能力**で大幅に劣っており(そりゃ「月刊正規空母」とか「週刊護衛空母」とかの国が相手だから仕方がない)、予備艦がないからである。本当にこまるのは人員で、**熟練の船乗り**が多数失われることは間接的に戦力ダウンにつながるのだ。



さて、米軍は1943年1月に撤退する（1943年1月は、史実で、日本軍が撤退している）。しかし、これ以上日本軍が進出することは考えられない。**兵站**(補給ライン)が伸びすぎる。おそらく米軍は史実通りマーシャル諸島方面から攻めてくるだろう。「オレンジ・プラン」通りである。しかし米軍の腕は拙く、日本軍は熟練が揃っている。そろそろ米軍も**新鋭**戦闘機 **F6F ヘルキャット** がくるころだが、ずっと迎撃戦なので、実用化された日本のインターセプターの「**雷電**」が仕事をするに違いない。こいつは爆撃用のエンジンをのつけた**大柄**な戦闘機で、**武装も強力**である。爆撃機でも新鋭の「**銀河**」が出てくるころである。こいつは「国滅びて銀河あり」と言われる名機で、とにかく何でもできる**優秀機**である。しかも乗員は前代の半分以下であり、単純計算で倍の機数が同じ人数の部隊に配備できるのだ。

このような部隊に挑む米太平洋艦隊は、数があっても**二流**の乗員＋乗組員である。これならうまくすると勝てたかもしれない。その場合、米世論は**反戦**に傾くはずなので、少なくとも史実よりも**優位に講和**ができたかもしれない。

結果として、ソロモンの死闘は日米両軍の明暗を分けたと思う。歴史に「タラレバ」はないが、こうすることで少しでも夢を見ることが出来たなら…と思う。

# ～完～

## あとがき

ここまでお読みいただきありがとうございました。部長です。今回は**歴史の「if」**ということで書いてもらいましたが、数人苦しんでいる子がいまして、彼らいわく「どう書けばいいのか分からない」とのこと。去年の部誌などがあれば見せたかったのですが、あいにく無かったので、彼らには苦勞をかけてしまいました。

まあ個性があふれて氾濫を起こしているような部活なので、各員どんな面白い予想をしてくるのかと楽しみにしていましたが、予想を上回る面白さでした。それぞれの分野(注・大分かたよっています)をうまいこと生かしていると思います。ここだけの話、史上最高なんじゃないでしょうか。——訂正、史上最高です。(断言)

本来なら、みんなで立体地図を作るのが恒例で、今年も場所まで決めていたのですがコロナで時間が無くなってしまい出来ませんでした。

このフザけ気味で深夜テンションで紅茶をキメたような文章を終わりたいと思います。分担した役割にのっとしてあれこれやってくれた部員や、顧問の先生方には感謝の言葉もありません。そんなことを思いつつ、ペンを置いて本を読もうかと。(寝落ち)

## クイズ解答欄

1		6		11	
2		7		12	
3		8		13	
4		9		14	
5		10		15	

問題は、3－Bの教室にあります。

Thank you.